
夢予報士

kouking

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夢予報士

【Nコード】

N8995E

【作者名】

kouking

【あらすじ】

主人公（悠基）は高校の入学式に向かう途中、小学校の時のトラウマである優紀子と出会う。が、いきなりの優紀子の女の子になる宣言。そして夢予報士の詩織の登場。悠基は憧れの高校生活をどう送るのか。

第1話

第1章

謎の予報士

今日は新しい出会いに胸躍る檜山学園の入学式だ
予定より少し早く家を出て中学とは逆の方向に歩きだす・
どんな人たちと出会うのだろうか、どんな3年間を送るのだろうと
期待で胸いっぱいになり歩いていると・・・

「あれ、悠基？」

聞き覚えのある声が右後ろから聞こえてきた・
色々考えた結果
聞こえない振りをしてみる・

「ちよつと聞こえてんでしょ?!」

「はい!？」

嫌々ながらも振り返える。

「悠基も檜山学園なんだよね??」

長内優紀子・何かにつけて悪戯や邪魔をしてくる幼馴染。違う中
学に通っていたが何かの間違いで同じ高校になってしまったらしい・

期待で胸いっぱいになり歩いていた10秒前・・一気に不安のど
ん底におとされた・

（お願いです！同じクラスだけにはならないでください。神様！）
不安だらけで歩いていると・・・

向こうから小柄で白いワンピースの清楚な感じの少女がハッとこっ
ちを見て俯き走り去って行った。

なにか言いたそうだったが、今の自分の置かれてる状況からそれを

気にかける余裕はなかった。

そうこうしてるうちに3年間通うであろう檜山学園の校門が見えてきた。

「悠基。私たちここに3年間通うんだね。楽しみ〜!!」

いやいや、優紀子がいるせいで不安で仕方ない。と思いつつも

「そうだな。たのしみだな!!」

と言ってしまふ

「あつ。掲示板にクラス発表されてるね〜!見に行こう!!」

ここで3年間の運命が決まるといっても過言ではない。

一抹の不安を胸に白い紙きれに向かって歩いてゆく。

お願いしますっ!!どうか同じクラスだけは。

「はあ。私は4組かあ、爽やか3組がよかったなあ。」

どーでもいいけど同じクラスにならなければ。

自分の名前を探す・・・田神・・・田神・・・

(おっ!!!!!!爽やか3組に田神の文字が!!よし!!)

つて、将太かよ。同じ苗字がいるとは。

(まさか)、

一瞬にして自分のピンチに気づく。これってあいうえお順で決まってるはずだから・・・

隣で突然大声を出す優紀子

「ああ!!!!!!悠基も4組じゃあああん!!!!!!」

(うわあ、やっちゃったよ)。まさかこうなるとは・・・)

「運命つてすごいね〜！」

と、知り合いが同じクラスにいて、うれしそうに話す優紀子を横目に不幸のどん底にいたその時。

チャイムの音が聞こえてくる。

「急がないと！悠基初日から遅刻しちゃうよ！！」
俺をおいて走りさる優紀子。

上履きに履き替えクラスへ向かう。

教室に入ると優紀子がニヤリとこっちをみていた。それを気付かないふりをして、自分の席を探す。

席に座ると隣には中学の時から仲が良かった里谷 裕一がいた。こいつはなかなかの面構えで正直うらやましいほどモテる。言うこと無しだが、ひとつだけ問題が。子供のころから人が遊んでるモノや好きになった人まで何でもとってしまうということ。

そこだけは許せないがそれ以外は気の許せる数少ない友達だ

「悠基もこのクラスなんだな！これから3年間よろしくな！」

「おう！よろしくな！」

「そっぴや、優紀子も同じクラスなんだな」

裕一は意味深な表情をして言うてる。

その意味を察した俺はあえて何も言わず、どう3年間優紀子と距離を置くか考えていた。

なぜ、こんなにも優紀子を避けたいかというと、小学生の時毎日のように遊んでいて（別に遊ぶ気はない）、いつも泣かされてほかの女の子に慰められ助けられるという、大変情けない小学時代を送っ

ていたのが今でもトラウマになっていて、できればもう会いたくない人ランキング堂々の一位だ。裕一はなにも見てないふりだし。というか怯えていたっけ

そういえば、あの時よく助けてくれたあの子は今どこにいるんだろう。

自分は親の仕事の都合で違う中学に通っていたため、片山がこの高校に行ったかのか知ることができなかった。

「裕一、そういえば片山ってどこの高校に進んだんだ？」

「あ？片山？？ああゝあいつはゝどこだっけな？？確か隣の南条高校じゃないか？？」

「そっか　ありがとう」

「いきなりどうしたんだ？？片山は昔から頭良かったしあの高校しかないだろう」

「いや、ふと思い出してな」

ひょっとしたら同じ高校なんじゃないのか。と期待してみたがやはり頭良かったし平凡な

檜山高校にはこないか。

「悠基は片山に甘えてばかりだからなあゝ」

確かにあの頃は優紀子にいじめられて片山に助けてもらったという日常を繰り返していたからなあ。

それよりも今は優紀子との距離を作るということを最優先で考えよう。

そんな事を考えてるうちに入学式が終わり、クラスに戻り授業の教科書などが配られる。

まだ春休みの感覚が抜けていない僕は山のように積み重ねられた教科書を見て、少し憂鬱になった。そこに優紀子という存在が加わり

現実逃避したくなっていた。

どう考えてもプラス要因が見当たらない。唯つの救いは裕一がいることだけ。

皆一斉に席を立つ。帰りのホームルームが終わった。

さっさと帰ろうとしているとズカズカと優紀子がこっちに寄ってくる。

「今日さ、久しぶりに会ったんだしどっか食べに行こうよ」

ニコニコしながら優紀子という言葉が悪魔の囁きに聞こえる・

「きよ、今日はちよっ・・・」

「なに??? いかないの??」

「行きます!!」

「あつ、裕一も行くでしょ?」

「えっ、俺も? いいけど・・・」

「はい、決定!!」

僕は裕一も巻き添いを食らうことを心から喜んだ。

裕一も優紀子には頭が上がらないようだ。

高校の近場にあるファミレスに決定し、俺と雄一の向かいに優紀子が座った。

「ご注文はおきまりですか??」

「あたしはハンバーグセット!! 二人は??」

「同じもので・・・」

「俺も」

優紀子と食べるとどんなものでも同じ味がする気がして食欲が二人とも湧かなかった

「それにしても、まさかこの3人が同じクラスになるとはねえ」。
また3人で仲良くやっていこうね」

俺は耳を疑った。仲良く??ありえない。

同じことを裕一も思っているだろう。

「じゃあ、俺はそろそろ・・・」

ご飯も食べ終わり、裕一があたかも予定があるような素振りで帰ろうとする。

「そう?じゃあね」

とあっさりそれを認める優紀子

「あっ、裕一君お会計よろしくね?」

「はっ、はい」

この呪縛から逃れられるなら安いもんだ。

「じゃあ、私たちもいこっ」

「おっ、おう」

「ちよつと、行きたい場所あるんだ!!」

特に予定もないだろうと思われる裕一に別れを告げ、近くの川の土手にやってきた。

「今日はさあ、久々に悠基に逢って言いたいことがあったんだ」

突然そんな事を言われて何か悪い事したのかと悠基は一日の行動を疑ったが、それらしい行動は取った記憶はない。

「なんかした??」

「あのね、あたしって小学校の時とかつてすごい攻撃的な性格だったでしょ?」

「ん、たしかに・・・」

内心はかなり攻撃的というかがキ大将とか思った

「でね、高校ではそういうの直して女の子らしくなろうと思って。

ごめんね、あの頃は毎日のように悠基に意地悪して」

「いいよ!別に。あの頃はまだ小さかったんだし、そーゆー時期もあるって」

「うん、最近さこんな性格じゃ恋愛すらできないのかなあ。と思つてさあ〜」

確かにあの性格だとまず男は寄つてこないだろう。優紀子はスタイルもいいしだまつてりやそこそこモテるはずなのは確かだ。

「あの頃は、帰り道に道路に突き出したり、なぐつたり蹴つたりしたりしてて最近悪いことしたなあ〜、ケジメつけなきゃと思つて」「そっか、もう気にしてないから！俺も高校にはいったら恋愛の一つくらいしたいと思つてたし、お互い恋人ができるよう頑張ろう」「うん、頑張ろう」

優紀子はどこか悲しげな表情をしていた。

僕は高校生活を優紀子に邪魔されず3年間過ごせそうなのでホツとした。

「じゃああたし帰るね！！明日遅刻しないようにね！ばいばい！！」

「うん、僕も帰るよ」

これからの不安だった高校生活が一気に希望満ち溢れた。そんな気持ちで家路を辿る途中、朝見かけた白いワンピースの少女が立っていた。

俺を見つけるなり大声を出しながら走つてこっちに向かつてきた。

「あつあ〜のお〜」

なんだこの子？？と思い一応逃げる準備をする。

少女は僕の目の前で止まり息を切らしながらこういった。

「あの、私・・・」

「あなたの予報士務めさせていただきます！夢風 志乃です！！よろしく願ひします！！」

少女は恥ずかしそうに自己紹介をした。

「えっ？？なんだって??」

僕はまったく意味がわからず頭がフリーズする。

「だから、夢凧 志乃です！！よろしくです！！」

「名前はわかったけど・・・なんだって??」

「夢予報士です」

近年、こうゆう子達が犯罪をおこすのだろう

「よし、もう遅いし家もしくは病院まで送って行くよ！」

「この世界に家はありません」

「この世界？」

なんだこのよくアニメなどでありがちな展開は・・・

「はい、この世界は今日初めて来ましたから」

「えっ、どこからきたの??」

「えっと、ハナマルワールドです！」

なんだそのテキトーな、いかにもなワールドは！

「そこから、わざわざ何しにこの世界に来たの??」

「だから、あなたの夢予報をしにきたんです」

「なんで、僕??」

「ハナマルワールドでは異世界の人達を夢

予報で少しでも不幸を軽減させ、幸せにするという義務というかなんというか・・・があるんです。それで昨日づけで不幸な生活をしていたあなたが選ばれたんです」

他のひとから見ても誰かの援助が必要なくらい僕は不幸な生活を送っていたのか？

確かに、優紀子にいじめられたりで、何回も入院したりはしてたし人生振り返ると不幸なことばかりだった気が・・・でもそんなになかな？

「僕、そんな不幸な人生送ってた？」

「はい、ざっと履歴見ましたが不幸だらけじゃないですかーまあ、幸せになりたいと強く思ってる人が選ばれる傾向にありますね」

「あはは・・・」

そつかあゝ、改めて人に言われると悲しいな。

「だから私がきたんです。まっ、援助といっても結局は自分運命ですからねえゝ、私たちはそれを予報する、ただ単に起こる不幸など前もって知っていたら気持ちが悪いかどうか、私はその程度の予報しかできませんが」

ほかにも予報士がいるような口調で淡々と語る少女をみて、俺の高校生活の間何かすさまじい事になりそうで、少し不安になった。一難去ってまた一難とはこのコトだ。

「夢予報士つてのはそんなにいるのか??」

「この世界には多分私だけです。みんなはほかの世界で夢予報をしています」

「ほかの世界つてそんなに世界つてあるの??」

「はい、無数に。その中でも選りすぐりの人物がたまたまあなただけただけです」

僕つてそんな不幸だったんだ。無数にある世界の中でこの地球だけでもそうとうな人がいるのに。

「あつ、そうだ。何で朝逃げたの?」

「えっ???と・・・少し人見知りなんです」

さっきまで淡々と話していた少女が最初の時の普通の少女の顔に戻る。

「でっでは、私はハナマルワールドに戻ります。また来ます」

少女には聞きたいことがたくさんあったが、少女は足早に去って行った。

おかしな子だなあゝ。と僕はあんまり少女の事を気にせず家路を急いだ。

「ただいまゝゝ」

誰も反応してくれない家。お父さんもお母さんも仕事で夜遅くまで帰ってこない、まあ仕事だから仕方ない。田神家も生活をしていかなければならないし。

よし寝るかあ、明日からの高校生活で頭がいっぱいだった。優紀子の件はなんとかかなりそうだし。

僕は、夢予報士なんてものを忘れ眠りにつくのであった。

第2話

第2話 予報的中!?

朝、予定時刻に起きリビングに向かうと、いつの間にか帰ってきていたおかあさんが朝ごはんを作ってくれていた。

「おはよう」

「あら、もう起きたの？早いわね」

「今日は、裕一と待ち合わせしてるから」

「そう、頑張ってたきなさいね」

久しぶりの親との会話だ。そういえば、母親のごはん食べるのも何ヶ月振りだろう。

ひとくちづつ噛みしめて食べる。手料理は田神家ではめったに食べれないから。

「ごちそうさま！いつてくるね」

「今日も遅くなるわよ」

「わかった」

昔からずっと母さんも倒産も寝る前に帰ってきたことはない。体を壊さないでいてくれればそれでいい・・

少し早く待ち合わせ場所についた。時計をみながら祐一の来る方向を見ていると、後ろの方から女の子の声が聞こえた。

「おはようございます!!」

後ろを振り返ると、昨日の帰り道に出会った少女が眠たそうな表情で立っていた。

「おっ、ホントにきたんだ!？」

「はい、義務みたいな物ですから」

みたいなものって半分違うならほっといってくれないかなあ。

「そっか」

「えっと、今日はですね、懐かしい友人と再会する日でしょう」
得意げな顔で少女は言う。

そんなの高校入って昨日はバタバタしてたし、今日が授業初日そりや久しぶりに小学校の友達に再会するのは必須だろ、アバウトすぎると思いつつ

「そっか、わかった」

「いえいえ、義務みたいなものですから」
と、得意げな顔をして去っていつてしまった

あのやけに得意げな顔は、はなにつくが気にしないで高校生活を楽しもう。

そーすると、裕一の声が聞こえてきた。

「わりいゝ遅くなって！」

少女と話しをしていて時間の事を忘れていたが、ギリギリな時間になつていた。

「おう！急ごう」

駆け足で教室にむかう。タイミングよくチャイムが鳴る。

「ふうゝ、なんとか間に合ったなあゝ」

「悠基ごめんなあゝ、母さんが弁当持ってけってうるさくてさ」

「うん、いいよ！明日からは頼むよゝ」

「おう！」

担任の新藤先生が教壇に立ち朝のホームルームが始まる。

「さっそく、今日から授業だ！気合入れて授業に取りくむように！」
生徒たちはだるそうな返事をする。

それを聞いた新藤先生は、小さくため息をついて大きな声で生徒たちにかこう言った。

「お前ら、気合いが足りん！！もう一回返事しろよ！！気合入れ

て授業に取りくむように!!」

そうすると生徒たちは一斉にはいつ!と返事をした。

先生も、うなずき笑顔で教室から出て行った。

「あの先生は檜山高校で一番熱血らしいですよ」

と、隣に座っていた眼鏡の女の子が話かけてきた。

「あつ、私は山崎菜々つていいいます。よろしくおねがいします」

いかにも生徒会にいなそうな感じの頭のよさそうな子だ。

「自分は、田神悠基つていいいます、よろしく」

「はい、田神さんはどこの中学校だったんですか?」

「館台中学だよ。山崎さんは?」

「私は真山中学校です。少し離れてはいるけど親も通っていた檜山高校にしました」

話に裕一がはいつてくる。

「俺のばーちゃん家が真中の近くで、よく中学の前通つてたよ」

「そうなんですかー?それじゃあ会った事あるかもしれないですね」

「そうだねー」

こんな些細な会話でも笑い話になる高校生活は思い描く通りだった。とつくに始まっていた授業も気づかないで

その間でも山崎さんはしっかりとノートに黒板の事を書き記している。イメージ通りの女の子だ。

何気なく、優紀子の方に視線を向けると何か考え事をしているようだった。まあ、こつちに被害さえないければどーでもいいけど。

気づくとチャイムが鳴りお昼の時間になった。

「悠基、飯買いに行こうぜ!」

「うん」

「ここの購買のカレーパンは人気あるからは早く行かないとなくなるぞ」

「そうなの?朝弁当もらったんじゃないの?」

「いや、置いてきた!だってカレーパン食べたいじゃん」

走りながら、購買に向かう。

購買は非常に混雑している。そんな中なんとかお目当てのカレーパンを手に入れて教室に戻る。階段を上り教室に入ろうとした時昔に聞いたような声に引き留められた。

「悠基君！！！！裕一君も！！！！」

まったく見覚えのない顔の男が駆け寄ってきた。裕一と顔を見合わせ覚えのない顔に戸惑う。

「山野 颯太です！！小学の時よく遊んでた！」

声をそろえて叫ぶ。

「ああ！！！！颯太かあ！！！！」

「久しぶりだなあ、裕一も俺も懐かしすぎてわからなかったよ！！」

「転校して行ってから、もう会えないと思ってた！」

「ひどいですねえ、二人とも！高校は戻ってくるって言ってたはずですけどね」

「そうだったけ？」

「まあ、こうやって再会できたんだし、よかったじゃん」

「颯太は何組なの？」

「僕は三組です」

「じゃあ、今度遊びに行くよ！裕一と！！隣だし！」

「じゃあまた」

長い金髪の毛をなびかせ彼は自分の教室にはいつていった。

「俺たちも、早く食べないと午後の授業始まっちゃうぞ」

裕一も僕もあせてカレーパンを口に入れる。味わう時間もなく、ジャージに着替え体育の準備に入る。急いでグラウンドに向かう。

そうして一日の授業が終わり。

帰る準備をしていると、裕一が3組の颯太とゲームセンターに行

こうと話してるのが聞こえたので、自分も迷わず会話に参加する。

「行く行く！ゲームセンターでしょ？」

「おっ、悠基も行くか??」

「久しぶりに再会したわけですし、行きましょう」

帰る準備を済ませ、優紀子に見つからないようにそつと教室を後にする。

いくら、女の子宣言したからってあの寝見せられたらいつ元の優紀子に戻るかわからない。

毎日つけまわされて泣かされ、帰っても誰もいない家で一人泣いてたっけ。入院した時もあったし、やっぱり優紀子は天敵だな。

久しぶりの三人。楽しい時間というのはすぐ過ぎてしまう。

「楽しかったなあ、カーレース。俺と颯太は服見に行くけど、悠基はどうする？」

「ごめん！きょうは用事があるんだ！また今度いくよ」

「それでは、仕方ありませんね」

「そうか、じゃあなあ」

前に借りた映画見てなかったんだあ、あれ今日中に返さないといけないし。

二人と別れ街の商店街を抜けたところで長い黒髪の制服の女の子に目を奪われた。

呆然とその子に見とれていると、目が合ってしまった。

その女の子はこっちの方に歩いてくる。

（やばい！！）

「悠基君？」

「え???つと・・・」

「悠基君だ!!」

「ん?片山??」

「片山美沙子だよ!元気してた??」

「う、うん!!久しぶり!片山こそ元気だった?」

「うん、なかなか同じ街に住んでるのに逢わないから心配だったんだあ」

「なんとかね」

「その制服は檜山高校?優紀子と一緒にだね。虐められてない?大丈夫?」

なんてやさしい子なんだ。優紀子にもこんな一面があればな・・・

「なんとかね・・・なんか女の子になる!って宣言してたよ」

「優紀子もきつと恋愛してみたいんだね。あの子男の子っぽかったから」

「いやいや、男以上の男だよ!!」

「あの子も今色々大変らしいから、優しくしてあげてね」

「そーいえば今日も元気なかったしなんかあったの??」

「詳しくはわからないけどお母さんが倒れちゃって入院してるみたいだよ」

「そうだったの??だからかあ」

「うん、だからお互い仲良くしてね」。私は友達待たせてるし行かないと行けないから」

「うん、またね」

「悠基君ばいばい!」

手を振りながら笑って立ち去る彼女は昔と変わっていなかった。
あんな子と同じ高校だったらどんなに毎日がたのしくなるのだろう。

家に着いて借りた映画を観るはずが全然見る気にならない。楽しみにしてた映画なのに。

結局見ないで返してしまった。

今日は片山の事であたまでいっぱいだ、また近いうちに会えるのだろうか。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8995e/>

夢予報士

2010年10月28日00時50分発行